

第1章 調査研究

調査研究では、先行研究の分析を通して高大接続を考えるための基本的な問題を明らかにすることとした。高校と大学間の諸問題のうち高大接続の問題は、従来、入試による選抜という側面から論じられてきた。しかし大学の全入状況の進展とともに、教育問題としての側面に焦点が当たってきた。本研究では、さらにこの観点を深めるために「学習の接続」という視点の必要性について考察した。

第1章 研究論考

「高大接続への視点—「教育の接続」から「学習の接続」へ—

島根大学入試センター 田中 均

第1節 高大接続研究の課題と問題の設定

本節では、「高大接続」という概念を規定する。高校と大学、中等教育と高等教育の間ではさまざまに生起する問題群があるが、その問題群をどのような視点からとらえるかが「高大接続」という概念である。高大接続という視点がどのような歴史的な経緯、あるいは社会的経緯から紡ぎだされてきたのかを、先行研究を分析し明らかにする。

(1) 高大接続研究の意義と課題—教育課題として着目される高大接続問題—

【高校・大学間にある問題状況の知見】

高等教育の大衆化という概念を示した1970年のマーチン・トロウの指摘以降もわが国の大学進学率は上昇を続け、2010年には47.8%に達するにいたった。短期大学進学率とあわせ、高等教育機関に進学する比率は53.9%であり、すでに高校卒業生のうち50%以上が高等教育機関に在籍するユニバーサル・アクセスの段階にはいつている。「学校基本調査」平成22年度速報値

高校までの教育課程が大学の教育カリキュラムと切り離されて構想されている日本の高校と大学の間では、ユニバーサル・アクセスの段階に入ったことで、日本固有のさまざまな問題が生じており、高校教育と大学教育の間での高大接続の問題もこうした問題のひとつである。

大学進学をめぐる知見では、社会的に機能するシステムとしての大学への進学をとらえる3つの視点を提示することができる。

第1に、大学進学を規定する社会的要因にかかわる知見である(喜多村1986ほか)。すなわち、教育への階級意識や態度、政府の教育政策、社会の労働市場、中等教育制度の性格等は、とりわけ労働市場の不透明感の強い今日、それでも上昇する高等教育機関へのアクセスを考えるならば、これらは大学進学を規定する要因として機能していると考えられよう。

第2に、階層移動や地域間移動が進学要因を規定するという知見である。所得階層によって進学要因が大きく

規定され、それが地域の経済状況を反映し進学による地域間移動の要因ともかかわり、大学進学を規定する要因として機能する視点である(天野1986,潮木1987,矢野・濱中2006,牟田1988ほか)。

第3に、個々の、あるいは集団としての高校生の受験行動に関する知見である。受験行動には今までに述べた諸要因を背景に、受験の意思決定に至る心理的な要因が機能する。また、大学進学を希望する高校生が在籍する高校の社会的評価、教育課程のあり方や進路指導・進学指導の特性などが意思決定を規定する。多様化する高校の設置形態や弾力化する教育課程のなかで、受験行動の規定要因には重層的で相互に関連しあう要因が機能するといつてよい。さらに、大学への進学を考える際に選抜方法やシステムがどのような妥当性をもつかも大学への進学を考える視点となる。入学者の入学後の成績推移から大学入試の試験の妥当性をとらえようとしたり(西堀・松下1963)、共通一次試験からセンター試験への経過がどのような制度的妥当性があるかを検証(木村2008)したりするなどである。

【今日の「高大接続問題】

しかし、今日の高大接続の問題もこのような大学への進学にかかわる日本固有の問題性を内包しつつも、そのスケールをはるかに超える問題提起性をはらんだ問題となっている。中村は「大学入学者選抜や高校カリキュラムと大学教育の整合性、あるいは入学資格上の制度的な接合性といった問題だけではなく、今後の教育システム全体の設計にまで及ぶ広範な議論を呼び起こしつつある。」(中村2010:288)と述べ、新たな問題領域として広がり指摘する。荒井は、高大接続の問題状況の推移を「長方形型の学校システムを志向しながら、できるだけ多くの人々が高等教育へ到達し、高等教育の達成を我がものとするにはどうしたらよいのか、それが今日の問題である。高校と大学の接続問題はいわばこの一部にすぎない。従来の選抜(入試選抜)に替わる新しい接続形態を「教育接続」と呼ぶとすれば、それはどんなシステムとなるのか」(荒井2005:11)として入試接続から教育接続への移行という考えを示し、「教育接続とは教育課程の積み上げによる円滑な進学の保証と適正な教育配置の達成をさす。」(荒井2004:10)と指摘して、「大学に入る事が目的ではなく、入学後にどんな学習をするのが重要である。その理解が広がれば、大学と高校のアーティキュレーションは自ずと形成される。高校教育は大学入試と接続するのではなく、大学教育と接続するの

でなければ意味はない。」(荒井 2007:13) と述べて、高大の教育連携に期待する。そして、現状の大学と高校との関係を見ると、高大接続には articulation (連接) という言葉よりも高校と大学の間にある chasm (溝) という表現が適合していると指摘する。高大接続の問題は「いかにしたら、溝を埋められるか」にあり、溝の深浅、形態は多様であり、その埋め方、乗り越え方も多様というのである(荒井 2010 :28)。高大接続の問題を考えるには、「教育システム全体の設計」や「溝」がなにをさすのか、あるいはそこにあるであろう「溝」をどのように想定し「埋め方乗り越え方」を考えるかという視点が不可欠なのである。

【「高大接続問題」の背景】

2000年代に入って新たな問題としてとらえられた高大接続の問題は、主として大学の危機意識の表明が発端となっている。1999年の「初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申)」(中央教育審議会答申 平成11年12月16日 以下「接続答申」)では、「大学入学志願者全員がいずれかの大学に入学できる事態が生じれば、入学者選抜の意味が大きく変化し、高校生の勉学意欲が減退するのではないかと」いった指摘や、いわゆる「学力低下」のおそれがあるのではないかと「いった指摘もなされている。」という現状認識を示したうえで高大接続の課題を4つ提起した。すなわち、初等中等教育課程での「自ら学び、自ら考える力」と高等教育での「課題探求能力」の接合、多様な能力・適性、意欲・関心、履歴を有する学生の進学にともなう円滑な「接続」の実現、大学入学者選抜において大学側の求める学生像と学生側の自らの能力・適性等に基づく主体的な大学選択という相互選択の在り方、キャリア教育の充実に伴う主体的な進路選択である。高等学校の多様化と選択の幅の弾力化の中で、生徒の履修・修得の状況の多様化にともなう学力の様態も多様化し、一人ひとりの学習履歴や学習能力の多様化が進む。そのなかで一人ひとりの能力を一層伸ばすことを企図して、飛び入学を中心課題として検討された「大学への早期入学及び高等学校・大学間の接続に関する協議会報告書」(中央教育審議会報告書 平成19年3月22日 以下「接続報告書」)では、「このような生徒の能力・意欲に応じた教育の実現を目指していくためには、「高等学校教育」あるいは「大学教育」のいずれか一面のみから論ずるべきではない。高等学校・大学の双方が、後期中等教育機関・高等教育機関としてそれぞれ独自の目的や役割を有していることを踏まえつつ、高

等学校と大学との接続を柔軟にとらえることが必要である。高等学校・大学間の接続の場面においては、ややもすると大学入学者選抜の点のみクローズアップされがちだが、高大連携の取り組みは、まさにそういった偏重に風穴を開け、両者の接続を円滑にするための有効な手段となりうるものである。」と期待感を表明し、科目履修生・聴講生の制度、公開講座や主張講義、スーパーサイエンス・ハイスクール(SSH)、スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール(SELHi)、サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト(SPP)等の先進的事業、学校外における学習の活用などの高校生が大学レベルの教育研究に触れる機会を示した。そして、多様な個性や可能性、能力を伸長することができる環境整備としてこうした学習機会を位置付けた。「たとえ、学力において優れた成績を収めている者であっても、全人格的成長の観点から、高等学校に籍を置きながらより高度な教育内容に触れることが適切な者もいるであろうし、逆に、個々の知識が不十分であったとしても、十分に大学レベルの教育内容を学ぶことができる高い学習意欲と学習方法を身につけている者もいる。そういった様々な個性に対し、適切な選択肢を複数示すことのできる環境の整備が必要である。」また、天野は大学の全入状況の進行とともに大学入試の選抜システムの崩壊がもたらした現状を「進学需要が減退するなか、教育機会の供給量が増加し過剰状態に近づくほど、学力による受験競争は全体として緩和され、大学間のハイパーキーも崩れ、選抜の厳しい大学と無選抜に近い大学との2極化現象が進行する。また高校生たちの学習に対する動機付けも、カリキュラムに対する縛りも弱くなっていく。そうした選抜システムの崩壊現象が、現実の問題になりつつあることは、理工系を中心に大学関係者の間から起こってきた、学力低下や理科離れを憂える声の高まりに象徴的に示されている。初等・中等教育について、子供たちの「学びからの逃走」がいわれているが、それが大学については、進学希望者の「学力試験からの逃走」となってあらわれはじめたのである。」(天野 2007:11)と指摘する。高大接続にかかわる問題は、初源的な段階から「教育接続」の問題であるという性格が刻印されたといってよいだろう。

この問題意識はさらに、高大接続を「大学進学希望者が高校教育から大学教育への円滑な移行ができるよう、高校・大学が連帯して責任を果たすこと」と定義して、高校には進学希望者の学習状況の適切な評価と指導、能力・意欲・関心にあった大学の適切な選択の指導を求め、

大学にはアドミッション・ポリシーの具体的な明示と大学選択に必要な情報の適切な提供や求める学生の適切な見出し方、入学時情報の初年次教育への適切な生かし方を求めて、大学進学希望者の学習意欲を喚起するものである（中央教育審議会初等中等教育分科会（第59回）資料「大学全入」時代における高等学校と大学との接続について」平成20年2月19日）とするものにといたる。それは、高校・大学教育の質的改善を図る手法の確立を求めるものであり、「その成果を、高校における指導の充実、高校生の学習意欲の向上や、大学入試、大学の初年次教育に役立てる」ことが期待される、とされるのである。

第2節 高大接続をとらえる問題の定義

(1) 「教育接続」概念の成立可能性

【「教育接続」の問題群】

高大接続は本来的に「教育接続」をその中心課題ととらえるべき性格がある。小山はカリキュラムの接合化とアーティキュレーション（垂直的結合）の視点からの入試方法の改革を課題として挙げている（小山 2004:216）。また、杉谷は「現状で、一方で、高校において受験シフト型の細分化した履修が求められ、他方で大学において大学院まで視野に入れた細分化した専門的な履修コースが構築されつつある。つまり、双方の細かいルートと細かいルートをうまくつなぎ合わせる（橋渡しする）ことが課題となっている。」と指摘したうえで、「両者がうまく接続するには、中央教育審議会が求めるような明確な進路意識や学習意欲を学生の側に前提にしてこそ成り立つもの」であるのに「高大接続の動向はそうした前提がすでに十分に成立しえないことを示して」おり、「学習者の視点にたった場合「接続」と「移行」の両面を再確認すべきである」として、学習者の視点で高大接続をとらえることの重要性を指摘している（杉谷 2004:22）。

「教育接続」としての高大接続の問題には、教育課程や教育カリキュラムの接続の問題、入学者選抜段階で大学教育への円滑な移行を促すシステムとしての接続の問題、そして、学習者としての学生の学習に関する接続の問題を避けて通ることはできない。これらの問題群にはさまざまな問題が提起されている。

教育課程や教育カリキュラムの接続の問題について、本来学校の制度としても、教育内容の点からしても、高校と大学の間には本質的な接続関係が成立しないのではないかというものが第1の疑問である。上構型の学校制

度として構築された日本の高校教育と大学教育は、入試による選抜を通してでしか接続関係が成立していなかった。したがって高校の教育課程を前提とした高等教育の教育カリキュラムは本来構築されていなかったのである。（兼松 2007:20）

池田は第2の、入学者選抜段階での接続の問題として「相互選択」の理念としての実効性に疑問を投げかける。「さらに述べれば、「相互選択」の理念が「大学の入学者受入方針の明示」という政策目標によって有効に実現されるのかについても疑問が残る。なぜなら、「接続」の観点からの入学者選抜の課題は、大学での学習内容・方法に高校での学習成果や活動ができるだけ転移可能になる選抜メカニズムを工夫するか、あるいは創り出すことではないのか、と考えるからである。」（池田 2004:61）ここでは杉谷の指摘にあるように、高校教育・大学教育の双方に多様性が増すなかで「接続」の問題を考えるならば、選抜システムの根本的な見直しが必要であることを物語るわけだが、選抜メカニズムの改変は当然、大学教育自体の改変を迫るものであることを見逃すことはできない。

これらの問題を考えると、中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」（中央教育審議会 平成20年12月24日）での高大接続の役割規定には、現実の高大接続の問題状況をとらえる視点が弱いと言わざるを得ない。「すなわち、大学全入時代を迎えた今日、教育の質を保証する観点から、システムとして高等学校と大学との接続の在り方を見直すことが重要である。そして、それぞれの学校段階において、一人一人の生徒や学生に対し、学力を客観的に把握する指標を活用し、そこ得られた情報を高等学校と大学間で共有することにより、教育の質を保証する新たな仕組みを構築していくことが望まれる。」なぜならば、本来接続が構想されていない高校教育と大学教育の教育内容の編成と実施について、双方が客観的に把握できる指標で学習者の学習習熟の程度や到達段階を情報として共有することで教育の質保証を構想する構造になっているからである。高校・大学間の教育内容をどのように構築していくかという論議を抜きには客観的な指標の策定も、情報共有の方法も、それが質の保証につながる担保にもなりえない。

【「高大接続テスト」が提起すること】

また、こうした認識の弱さは「高大接続テスト（仮称）」報告書にもひきつがれていき、課題を留保しながらその報告をまとめている。同報告書は文部科学省委託事業と

して「高等学校段階の学力を客観的に把握・活用できる新たな仕組みに関する調査研究」(平成22年9月30日)として報告されたものである。そこで示された認識は次のようなものであった。

国大協は「基本方針」のなかで、明治以来「専門教育」に重点を置き、「大学設置基準の大綱化」以来教養課程の改組・再編を実施してきた大学が、広い知的能力を欠く専門家を育成するのみでは現代に必要とされる専門教育の水準を達成し得ないことを表明し、大学における学部・学科中心の学生編成への反省やリベラル・アーツの意味の再確認にもつながる指摘をするとともに、高校での基礎的教科・科目の普遍的な履修による「普通教育の完成」の実現を提唱した。今日の大学は単に高い成績を取り競争試験に合格できる能力の獲得を求めているのではなく、高大接続に欠かすことのできない基準的な知的能力の一般的な達成を求めている。「高大接続テスト(仮称)」の検討は断片的な知識の詰め込みや特殊な解法能力の取得、さらに個性無視や知識偏重の教育を企図するものではなく、現代人が必要とする知的能力の基盤を確かなものとすることを企図している。

「高大接続テスト(仮称)」は教育改革の一環をなすが、そのすべてを集約して体現するものではない。

「高大接続テスト(仮称)」の導入の検討とあわせて、これからの時代にふさわしい高大接続を実現するためには、わが国の中等教育と高等教育を接続するためのいっそうの教育改革が必要である。それは中学校から高校への接続の在り方、高等教育への接続を展望した高校の教育課程の在り方の明確化、高大連携の在り方などである。

ここでは高等学校教育を普通教育の完成教育と位置付けつつ、日本における普通教育の完成がどのように高等教育段階に引き継がれていくのか、あるいは高等教育でどのように飛躍・発展するものであるかという教育内容の問題を留保しながら、客観的な学力把握を可能にするシステムの構築がめざされたのである。佐々木は高大接続に必要な「学力」の範囲と水準を明確にすることや大学入試センター試験の利活用方法の再検討などの大学の選抜形態の検討、高大接続を見据えた学習指導要領の実現等の課題を残していることを指摘しているのである。

(佐々木 2010:27)

(2) 「教育接続」から「学習接続」への視点

高大接続を「教育接続」の視点でとらえることに困難性があるとしても、高校生が円滑に大学教育に移行する機能を理念としての高大接続に求める状況は進行している。それでは、「教育接続」という文脈で高大接続をとらえることを留保しつつ、高大接続の問題状況を把握するにはどのような概念装置を導入すればよいのだろうか。

金子は大学の「教育力」を把握するための視点を学習過程そのもの、あるいは学習の成果そのものを計測すること、学生の自己認識、将来における社会での役割への展望などの人格的成熟度をとらえること、人格的成長過程にある学生のプラスのサイクルをとらえることを挙げる。(金子 2008:13) 教育の実効性を学習過程で、しかも高校の教科科目、大学の専門科目の分野・領域にとどまらず人格的な成長という広い視野からとらえる提言である。高校教育から大学教育への円滑な移行の状況をとらえようとするとき、学習者の学習過程に着目する視点は重要な視点である。なぜならば、教育課程や教育プログラムの接続には大きな「溝」があるにしても、その「溝」を超えて二つの教育課程や教育プログラムの成果と課題を統一的に体現するのは学習者である高校生・大学生であり、その学習の状況にこそ、高大接続がはらむ問題性をとらえるものが存在しているからである。濱名は初年次教育で対応すべき課題を明らかにするためには学生にとって円滑な移行がどのように進行していくかをとらえる必要性を述べ、さらに学習能力や自身の改善が進みにくいことに比べ新たな学習経験・体験を積むことによる変化は入学後早い段階で現れること、講義理科意欲の向上に代表される学習支援だけでなく対人関係の構築を包含する必要があること講義理解度と学習習慣・学習行動の間に相関があることを指摘する(濱名 2004:37-41)が、これも円滑な移行をとらえるときに、学習者である学生の学習に焦点化する必要性を述べているととらえることができよう。

円滑な移行というが、大学教育と高校教育の教育課程や教育プログラムは非連続的なものであるから、「移行」がなんらかの飛躍や転換をとまなうことはいうまでもない。学習者を中心に接続を考え、学習者の学習過程に視点を当てる際には、この飛躍や転換に着目する必要がある。

川島は高校教育と大学教育との間にある状況を「学生は、高校から大学へと2つの学校階梯を移行していくわけであるが、その両者、即ち、高校教育と大学教育の内

実が安定的に提供されているのかといえ、それ自体が流動的な状況にある。そのような段階においては、高校から大学への転換という問題の立て方自体も、再考しなければならないのではないか。異なる学校段階と学校文化への同化や馴化だけを意味するものではないであろう。」(川島, 2010 :25) と指摘する。また、松下は大学入学後の教育における「学びの転換」を **unlearn** という概念を用い鶴見、スピヴァク、トフラーを引用しながら「<学んできたことから(知識・技能や態度、信念など)を解体し、それらのうち有用な要素を用いて、新たな別の何かを再構築すること>を意味している。高校までに学んだことからいったんほどき、そのある部分を使いつつ(別の部分は捨てたり、新たに継ぎ足したりしながら)、必要にあわせて再構成する。」(松下, 2010 :11) としている。また、小野寺も大学受験に代表される高校での学習を「遂行目標志向」としてそこからの解放によって「学習目標志向」への転換を図ることが大学入学後の喫緊の課題であるとする(小野寺, 2008 :12-14)。大学教育そのものも流動性がある現状では、大学教育に馴化させることが転換ではなく、高校までの「学び」の成果と課題を、大学教育の目指す方向性に即して、どのように引き継いでいくかという問題のたてかたが必要となるのである。井下は「高等教育のグローバル化が進展する中、これまでに獲得した「知識の積み上げ」では対応できない、知識を自分に引き寄せて意味づけ直し、再構成する「知識の再構造化」が求められている。知識観の転換、学習観の転換が求められている」(井下, 2010 :28) として、重層的で流動的なカリキュラムを提案する。羽田は「学びの転換」をとらえるためには学習と教育との両面からの視点が必要であると指摘する。「「学びの転換」には、学習者から見ての学習の転換と、学習者が転換するための教育内容・学習内容の転換という2つの視点があり、両者の相互関係において「学びの転換」が果たされていると考えるべきではないか。」(羽田, 2010 :52) さらに、「「学びの転換」には、高校教育からの離脱としての転換と、文化・学術を身体化する段階での転換という2つのステージがあるのではないだろうか」と提起する。(羽田, 2010 :59)

これらの諸論を通して、初年次教育で課題とされている「学びの転換」には次のような課題があるのである。①認知的領域と情意的領域の双方の領域の相互関連のなかで学習過程や学習の習熟、到達点を取り上げる。②高校までの知識体系に対して、新たな知識構造の再構成と

いう文脈で学習過程をとらえる。③したがって高校教育における成果と課題を明確にとらえる必要がある。④「総合的な学習の時間」や専門学科高校での「課題研究」など高校でのアクティブラーニングによる学習成果についての評価が、入試を介在として大学教育への接続という点で不満がある。⑤IT活用技術やプレゼンテーション、あるいはノートテイクなどといったアカデミックスキルズと認知構造との関連をどのようにとらえるべきか。⑦学習主体の認知的及び情意的発達という点で高校での学習経験・成果・課題が大学での学修にもちこまれているかを明らかにすることが重要な解決課題となる。⑧認知的発達の中での思考形式の組み替えと言語能力の問題が重要であり大学の諸領域分野を通した汎用的な課題である。

(3) 高大接続をとらえる問題の設定

高校・大学での学習主体である高校生・大学生の「学習の接続」に着目することが、高大接続の問題状況を把握するためには不可欠である。では、「学習の接続」をどのような観点でとらえればよいか。

白川は大学新入生の適応状況をとらえるためには、大学での学習状況という認知的な側面と、対人関係などの大学入学後の新しい環境に対して社会的に適応する情意的な側面との2側面からとらえることを踏まえ、「学習」「対人関係」「生活全般」の3つの枠組みを設定した調査を行った。調査は大学入学時点ばかりでなく、同一の調査対象に対して2年次、3年次と継続して実施されているが、とりわけ初年次調査では、大学での学習に適応しているかどうかと学生の自分自身の能力に関する意識に関連があること、学生に学習面で適応を促すことが大学生活での自信につながるのみでなく、大学卒業後のキャリア形成へ積極的な意識につながることを確認している。(白川,2007:16-21) すでに述べたように、学習過程を人格的な成長という視点でとらえることの重要性はありつつも、狭義の学習、すなわち大学での講義や実習、実験にかかわるさまざまな学習活動(ノートテイク、暗記、資料収集と分析)への適応が、学習能力の自己認知と深く関連し、接続状況をとらえる際の核となることを物語る。

神藤らは、大学での学生の「学び」という概念そのものが明らかにされてこなかった経過や「学力」の内容ばかりが中心的に問題にされてきたことの問題性を指摘したうえで、知識レベルの接続というのとらえ方ではなく

知識習得の前提となる学習方略や学習態度といったレベルの接続について考える必要性を述べ、大学生を対象にして、高校から大学への移行期の「学業文化変容」が大学の学習方略の構築に影響を与えることについて記述式の調査を行っている。(神藤・石村 1999:23-39) また、佐藤は大学生が自分自身の学びの技術や姿勢をどのように自己評価するかをとらえる調査を行い、「学習技術」「学習特性」の2因子を抽出し、「辞書活用」「テストテクニック」「ノートテイキング」「遂行性」および「知的関心」を身に付いていると認識し、「計画性」「発問積極性」および「集中性」を身に付いていないと認識している傾向性を確認している。またこれらのスコアの大学間比較、成績自己評価による比較を行っている。(佐藤,2003:9-16) これらの知見から、学習の接続の状況をとらえるためには、IT活用技術や資料収集などの学習技術や学習スキル、グループ学習や発表学習など学習活動の様態、そして学習活動の中で発揮される計画性・管理能力・実行力などの学習方略や態度という3つの側面で、継続・移行・飛躍・転換の状況をとらえることが必要となるのである。

参考文献

- 喜多村和之 1986「高等教育体制の段階移行論—くトロウ・モデル>の再検討」 玉川大学出版部『高等教育の比較的考察—大学制度と中等後教育のシステム化』 pp29-47
- 天野郁夫 1986「エリートからマスへ—大衆化の過程と構造」 玉川大学出版部『高等教育の日本的構造』 pp127-173
- 潮木守一 1978「大学入学者の所得階層」 東京大学出版会『学歴社会の転換』 pp98-114
- 矢野眞和・濱中淳子 「なぜ、大学に進学しないのか—顕在的需要と潜在的需要の決定要因」 東洋館出版社『教育社会学研究』第79集 pp85-102
- 牟田博光 1988「進学移動と大学・短大の適正配置」 筑波大学大学研究センター編『大学研究』第1号 pp37-55
- 西堀道雄・松下康夫 1963「大学入学試験に関する研究—高校学業成績および大学入学試験成績と大学在学中の学業成績との関係」『国立教育研究所紀要』第37集 pp1-15
- 木村拓也 2008「共通1次試験・センター試験の制度的妥当性の問題」 独立行政法人日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト研究領域I-2「日本の教育システム」研究グループ『平成19年度国内セミナー 米国流測定文化の日本的受容の問題—日本の教育文化・テスト文化に応じた教育政策の立案に向けて(報告書)』 pp85-96
- 中村高康 2010「ユニバーサル化の課題としての「高大接続」」 玉川大学出版部『リーディングス日本の高等教育第1巻 大学への進学 選抜と接続』 pp286-293
- 荒井克弘 2005「入試選抜から教育接続へ」 玉川大学出版部『高校と大学の接続 入試選抜から教育接続へ』 pp9-16
- 荒井克弘 2004「国立大学の入学者選抜」 民主教育協会・高等教育研究所編『I D E—現代の高等教育』 No457 pp10-15
- 荒井克弘 2007「高校と大学のアーティキュレーション—受験シフトからの脱却—」 I D E大学協会編『I D E—現代の高等教育』 No489 pp9-13
- 荒井克弘 2010「高大接続問題をどう考えるか？」 学事出版『月刊高校教育』2010年10月号 pp28-31
- 天野郁夫 2007「「全入」時代の意味するもの」 I D E大学協会編『I D E—現代の高等教育』 No491 pp5-11
- 小山悦司 2004「高大連携の課題」 東信堂『新しい教養教育をめざして』第II部新しい教養教育の構築と未来への提言第1章大学が直面している問題 pp212-216
- 杉谷祐美子 2004「大学教育の接続—その現状と課題」 大学教育学会誌第26巻第2号 pp16-22
- 兼松儀郎 2007『中等教育と高等教育のアーティキュレーション』
- 池田輝政 2004「大学入試の改革—高等教育の構造変化に伴う政策転換をどうするか」 東信堂『学士課程教育の改革』 pp53-69
- 佐々木隆生 2010「「高大接続テスト(仮称)検討の現段階と諸論点」 学事出版『月刊高校教育』2010年10月号 pp24-27
- 金子元久 2008「大学の「教育力」とは何か」 大学教育学会誌第30巻第2号 pp12-14
- 濱名篤 2008「大学生にとっての円滑な移行」 大学教育学会誌第26巻第1号 pp37-41
- 川島啓二 2010「初年次教育から見た「学びの転換」」 東北大学高等教育開発推進センター編『大学における「学びの転換」と学士課程教育の将来』 pp16-27
- 松下佳代 2010「大学における「学びの転換」とは」 東

- 北大学高等教育開発推進センター編『大学における「学びの転換」と学士課程教育の将来』 pp5-15
- 小野寺淑行 2008「大学における学びの転換とは何かー大学段階での学習観の転換ー」 東北大学高等教育開発推進センター編『大学における「学びの転換」とは何か』 pp5-16
- 井下千以子 2010「学士課程カリキュラムマップに見る「学びの転換」と「学びの展開」ーWriting Across the Curriculum とFDー」 東北大学高等教育開発推進センター編『大学における「学びの転換」と学士課程教育の将来』 pp28-40
- 羽田貴史 2010「文化の継承と「学びの転換」」 東北大学高等教育開発推進センター編『大学における「学びの転換」と学士課程教育の将来』 pp52-62
- 白川優治 2007「学生パネル調査から明らかになった日本における初年次教育の可能性」 大学教育学会誌第29巻第1号 pp16-21
- 神藤貴昭・石村雅雄 「高等学校と大学の接続に関する研究（その1）ー学生の高等学校と大学における学業についての差異の認識の観点からー」 京都大学高等教育研究第5号 pp23-39
- 佐藤広志 2003「大学生の学習技術・学習習慣と学習力ー学習者の主体性はいかにして損なわれるのかー」 大学教育学会誌第25巻第1号 pp9-16」